

第4章 § 3の途中から イデアルの共通部分

担当:長谷川禎彦

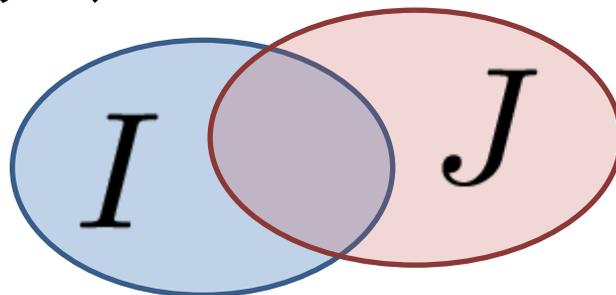
Idealの交わり (Intersection)

定義 8 $k[x_1, \dots, x_n]$ の2つのイデアル I と J の交わり $I \cap J$ は I と J の両方に属する多項式全体の集合である

定義 1 部分集合 $I \subset k[x_1, \dots, x_n]$ がイデアル (ideal) であるとは、次を満たすときをいう。

- (i) $0 \in I$.
- (ii) $f, g \in I$ ならば $f + g \in I$.
- (iii) $f \in I$ かつ $h \in k[x_1, \dots, x_n]$ ならば $hf \in I$.

Idealの交わり (Intersection)



- 命題9

I と J が $k[x_1, \dots, x_n]$ のイデアルならば $I \cap J$ もイデアルである.

証明 $0 \in I$ と $0 \in J$ より $0 \in I \cap J$ であることに注意する. $f, g \in I \cap J$ ならば $f, g \in I$ なので $f + g \in I$ である. 同様に $f + g \in J$ であるから $f + g \in I \cap J$ となる. 最後に乗法で閉じていることを示す. $f \in I \cap J$ とし, h を $k[x_1, \dots, x_n]$ の任意の多項式とする. $f \in I$ であり I はイデアルであるから, $h \cdot f \in I$ である. 同様に $h \cdot f \in J$ であるから $h \cdot f \in I \cap J$ となる. □

Idealの交わり (Intersection)

$IJ \subset I \cap J$ が常に成り立つことに注意しておこう。なぜなら IJ の元は $f \in I$ と $g \in J$ の積 fg の形で書ける多項式の和であり、それは $f \in I$ なので I に属し、 $g \in J$ なので J に属するからである。ところが、 IJ は $I \cap J$ に一致しないこともある。たとえば $I = J = \langle x, y \rangle$ のとき、 $IJ = \langle x^2, xy, y^2 \rangle$ は $I \cap J = I = \langle x, y \rangle$ に真に含まれる。(実際 $x \in I \cap J$ であるが $x \notin IJ$ である。)

Idealの交わり (Intersection)

$\mathbb{Q}[x, y]$

$$I = \langle f \rangle = \langle (x + y)^4 (x^2 + y)^2 (x - 5y) \rangle$$

$$J = \langle g \rangle = \langle (x + y)(x^2 + y)^3 (x + 3y) \rangle$$



$$I \cap J = \langle (x + y)^4 (x^2 + y)^3 (x - 5y)(x + 3y) \rangle$$

イデアルの交わりを解くための用意

I は Ideal of $k[x_1, \dots, x_n]$ $f(t) \in k[t]$

$$fI = \{f \cdot h : h \in I\} = \{f(t)h(x) : h(x) \in I\}$$

通常 of イデアルの積とは意味が異なる

I と f は異なる環に属する

多項式 $f \in k[t]$ が t のみの多項式であることを強調したい場合には、 $f = f(t)$ と記そう。同様に、多項式 $h \in k[x_1, \dots, x_n]$ が変数 x_1, \dots, x_n にしかよらないことを強調するのに $h = h(x)$ と記す。そしてまた、 $k[x_1, \dots, x_n, t]$ の多項式 g が変数 t と x_1, \dots, x_n の両方によっていることを強調したい場合、 $g = g(x, t)$ と書く。この記号を用いると、 $fI = f(t)I = \langle f(t)h(x) : h(x) \in I \rangle$ である。したがって、たとえば $f(t) = t^2 - t$ 、 $I = \langle x, y \rangle$ のとき、 $k[x, y, t]$ のイデアル $f(t)I$ は $(t^2 - t)x$ や $(t^2 - t)y$ を含む。さらに、イデアル $f(t)I$ がイデアルとして $(t^2 - t)x$ と $(t^2 - t)y$ で生成されていることを確認するのは難しくない。これは次の補題の例になっている。

補題10

$$(i) \quad I \subset k[x_1, \dots, x_n] \quad I = \langle p_1(x), \dots, p_r(x) \rangle$$



$$f(t)I \subset k[x_1, \dots, x_n, t]$$

$$f(t)I = \langle f(t)p_1(x), \dots, f(t)p_r(x) \rangle$$

$$(ii) \quad g(x, t) \in f(t)I \implies g(x, a) \in I, \quad a \in k$$

証明

$$g(x, t) \in f(t)I$$

$$g(x, t) = h(x, t)f(t)p(x) \quad h(x, t) \in k[x_1, \dots, x_n, t], p(x) \in k[x_1, \dots, x_n],$$

$p(x)$ はイデアル I の元なので、その生成元を用いて

$$p(x) = \sum_{i=1}^r q_i(x)p_i(x), \quad q_i(x) \in k[x_1, \dots, x_n]$$



$$g(x, t) = \sum_{i=1}^r h(x, t)q_i(x)f(t)p_i(x)$$



$$g(x, t) \in \langle f(t)p_1(x), \dots, f(t)p_r(x) \rangle$$

定理11

I, J を $k[x_1, \dots, x_n]$ のイデアルとする. このとき

$$I \cap J = (tI + (1-t)J) \cap k[x_1, \dots, x_n]$$

$tI + (1-t)J$ は $k[x_1, \dots, x_n, t]$ のイデアルであることに注意. なぜなら, tI も $(1-t)J$ もイデアルであり, さらにその和もそうであるから.

例によって両側向きの包含関係を示すことで等式を示そう.

$$I \cap J \implies (tI + (1-t)J) \cap k[x_1, \dots, x_n]$$

$$\begin{array}{l} f \in I \cap J \\ f \in J \end{array} \implies \begin{array}{l} f \in I \text{ なので } t \cdot f \in tI \\ (1-t) \cdot f \in (1-t)J \end{array}$$

$$f = t \cdot f + (1-t) \cdot f \in tI + (1-t)J$$

$$I, J \subset k[x_1, \dots, x_n] \text{ なので } f \in (tI + (1-t)J) \cap k[x_1, \dots, x_n]$$

$$I \cap J \Leftarrow (tI + (1-t)J) \cap k[x_1, \dots, x_n]$$

$f \in (tI + (1-t)J) \cap k[x_1, \dots, x_n]$ とする



$g(x, t) \in tI$ と $h(x, t) \in (1-t)J$ を用いて $f(x) = g(x, t) + h(x, t)$



tI は t の倍元なので, $g(x, 0) = 0$



$f(x) = h(x, 0)$ となり, 補題 10 より $f(x) \in J$ である

同様に $h(x, 1) = 0$ である. よって $f(x) = g(x, 1)$ であり $f(x) \in I$



$$f \in I \cap J$$



$$I \cap J \supset (tI + (1-t)J) \cap k[x_1, \dots, x_n]$$

Ideal intersection algorithm

$$I = \langle f_1, \dots, f_r \rangle \quad J = \langle g_1, \dots, g_s \rangle$$

$$\langle tf_1, \dots, tf_r, (1-t)g_1, \dots, (1-t)g_s \rangle \subset k[x_1, \dots, x_n, t]$$

Groebner basis  $\text{lex}(t, x_1, \dots, x_n)$

$$I \cap J$$

消去理論を参照

例

この手順の簡単な例として、 $\mathbb{Q}[x, y]$ のイデアル $I = \langle x^2y \rangle$ と $J = \langle xy^2 \rangle$ の交わりを計算してみよう。まず $\mathbb{Q}[t, x, y]$ のイデアル

$$tI + (1 - t)J = \langle tx^2y, (1 - t)xy^2 \rangle = \langle tx^2y, txy^2 - xy^2 \rangle$$

を考える。生成元の S 多項式を計算すると $tx^2y^2 - (tx^2y^2 - x^2y^2) = x^2y^2$ を得る。 $\{tx^2y, txy^2 - xy^2, x^2y^2\}$ が、 $t > x > y$ となるような lex 順序に関する $tI + (1 - t)J$ のグレブナ基底であることは容易に確かめられる。消去定理より $\{x^2y^2\}$ は $(tI + (1 - t)J) \cap \mathbb{Q}[x, y]$ の (グレブナ) 基底である。したがって

$$I \cap J = \langle x^2y^2 \rangle$$

定義12 最小公倍数

$$f, g, h \in k[x_1, \dots, x_n]$$

- i. f は h を割り切り, g は h を割り切る
- ii. h は f と g の両方を割り切るような任意の多項式を割り切る

$$h = \text{LCM}(f, g)$$

Example $\text{LCM}(x^2y, xy^2) = x^2y^2$

$$\begin{aligned} & \text{LCM}((x+y)^4(x^2+y)^2(x-5y), (x+y)(x^2+y)^3(x+3y)) \\ &= (x+y)^4(x^2+y)^3(x-5y)(x+3y) \end{aligned}$$

最小公倍数

$$f, g \in k[x_1, \dots, x_n]$$

$$f = f_1^{a_1} \cdots f_r^{a_r}, \quad g = g_1^{b_1} \cdots g_s^{b_s}$$



$1 \leq l \leq \min(r, s)$ となるような l に対して

$1 \leq i \leq l$ なら f_i が g_i の (ゼロでない) 定数倍

$i, j > l$ なら f_i は g_j の定数倍ではないようにできる



$$\text{LCM}(f, g) = f_1^{\max(a_1, b_1)} \cdots f_l^{\max(a_l, b_l)} \cdot g_{l+1}^{b_{l+1}} \cdots g_s^{b_s} \cdot f_{l+1}^{a_{l+1}} \cdots f_r^{a_r}$$

命題13

命題 13 (i) 2つの主イデアル $I, J \subset k[x_1, \dots, x_n]$ の交わり $I \cap J$ は主イデアルである.

(ii) $I = \langle f \rangle$, $J = \langle g \rangle$, $I \cap J = \langle h \rangle$ とすれば,

$$h = \text{LCM}(f, g)$$

が成り立つ.

最小公倍元を計算するアルゴリズム

$f, g \in k[x_1, \dots, x_n]$ の最小公倍元を計算する



交わり $\langle f \rangle \cap \langle g \rangle$ を計算する



この交わりは主イデアルでありその生成元は f と g の最小公倍元である

命題14

命題 14 $f, g \in k[x_1, \dots, x_n]$ とする. このとき

$$\text{LCM}(f, g) \cdot \text{GCD}(f, g) = fg$$

である.

何故なら

$$\text{LCM}(f, g) = f_1^{\max(a_1, b_1)} \cdots f_l^{\max(a_l, b_l)} \cdot g_{l+1}^{b_{l+1}} \cdots g_s^{b_s} \cdot f_{l+1}^{a_{l+1}} \cdots f_r^{a_r}$$

$$\text{GCD}(f, g) = f_1^{\min(a_1, b_1)} \cdots f_l^{\min(a_l, b_l)}$$

$$\frac{f_1^{a_1+b_1}}{f_1^{\max(a_1, b_1)}} = f_1^{\min(a_1, b_1)}$$

交わり操作と多様体の関係

定理 15 I と J を $k[x_1, \dots, x_n]$ のイデアルとすると, $V(I \cap J) = V(I) \cup V(J)$ である.

証明 $x \in V(I) \cup V(J)$ とすると $x \in V(I)$ または $x \in V(J)$ である. $x \in V(I)$ ならば $I \cap J \subset I$ なので $x \in V(I \cap J)$ である. $x \in V(J)$ ならば $I \cap J \subset J$ なので $x \in V(I \cap J)$ である. したがって $V(I) \cup V(J) \subset V(I \cap J)$ となる.

他方, $IJ \subset I \cap J$ なので $V(I \cap J) \subset V(IJ)$ である. ところが定理 7 より $V(IJ) = V(I) \cup V(J)$ である. したがって逆向きの包含関係も成り立つ. \square

命題16

命題 16 I, J を任意のイデアルとする. このとき

$$\sqrt{I \cap J} = \sqrt{I} \cap \sqrt{J}$$

である.

証明 $f \in \sqrt{I \cap J}$ ならば, $f^m \in I \cap J$ となるような整数 $m > 0$ が存在する. $f^m \in I$ なので $f \in \sqrt{I}$ であり, 同様に $f \in \sqrt{J}$ である. したがって $\sqrt{I \cap J} \subset \sqrt{I} \cap \sqrt{J}$ となる.

逆向きの包含関係を示そう. $f \in \sqrt{I} \cap \sqrt{J}$ とする. このとき, $f^m \in I$, $f^p \in J$ となるような整数 $m, p > 0$ が存在する. $f^{m+p} = f^m f^p \in I \cap J$ なので $f \in \sqrt{I \cap J}$ である.